

YOSAKOI ソーラン祭りの拡大に関する一考察

A Study about Development of Dancing Festival 'Yosakoi Soran Matsuri'

増 山 尚 美

Naomi MASHIYAMA

I は じ め に

YOSAKOI ソーラン祭りは、北海道のイベントとして定着し、主会場の札幌市のみならず、全道に影響を及ぼすに至った。1998 年度は経済効果が道内最大のフェスティバルであった「さっぽろ雪まつり」を越えたとも言われる。知名度も上り、ニュースとして報道や紹介されるだけでなく、荒れた学校が文化活動に取り入れ再生された過程は、映画にもなった¹⁾。祭りを知った人、見た人、参加した人を通して、飛び火するように、道内だけでなく道外でも、同様の踊りやイベントに取り組むところが出てきている。しかし、この祭りは始まってまだ 10 年も経たない新しいイベントである。また YOSAKOI ソーラン祭り自体が高知県のよさこい祭りを元に、そのスタイルを目標に創造されたものである。それが年ごとに倍とも言える勢いで規模がふくらみ、今や本家のよさこい祭りをしのぐ大きな祭りに成長した。この祭りが拡大を続けているのはなぜか。また、このイベントと踊りの何が人々の心をつかんだのか。

本研究の目的は、YOSAKOI ソーラン祭りの拡大する要因を、よさこい祭りと比較することで明らかにすることである。また、舞踊文化の視点から考察を加える。

II 方 法

下記の文献及びガイドブック、新聞記事、主催団体発行の資料をもとに YOSAKOI ソーラン祭りおよびよさこい祭りの実態を把握する。更によさこい祭りとの共通点と相違点から、祭りの拡大する要因を明らかにする。また、多くの人々を触発するのはなぜか、鳴子踊りについて舞踊文化の視点から考察を行う。

<文献>

- ① YOSAKOI ソーラン祭り読本(飯田舞・YOSAKOI ソーラン祭り普及振興会編, すずさわ書店, 1996)
- ② 踊れ「YOSAKOI ソーラン祭り」の青春(軍司貞則, 文藝春秋, 1996)
- ③ よさこい祭り 40 年(よさこい祭振興会, 1994)

<主催団体発行の資料>

- ④ YOSAKOI ソーラン祭りガイドブック 1998 (YOSAKOI ソーラン祭り組織委員会)
- ⑤ YOSAKOI ソーラン祭り組織委員会公表資料
- ⑥ 第 8 回 YOSAKOI ソーラン祭り参加要項 (YOSAKOI ソーラン祭り組織委員会, 1998)

⑦よさこいガイドマップ（高知商工会議所よさこい祭振興会，1998）

⑧よさこい読本（高知商工会議所よさこい祭振興会，1998）

⑨南国高知よさこい祭り（高知市観光課・高知市観光協会，1998）

⑩高知商工会議所よさこい祭振興会公表資料

<新聞記事>

⑪灼—よさこい進化論—（高知新聞，1998 年 6 月 10 日～11 月 28 日，夕刊に掲載）

III 結果と考察

1 よさこい祭りと YOSAKOI ソーラン祭りの比較

1) 祭りの創設

よさこい祭りは 1954 年(昭和 29 年)に、高知県商工会議所が中心となって創設された。1998 年に第 45 回を数える。高知市と商工会議所は商業と観光の活性化のため人を呼び込む目的でイベントを考えていた。昭和 25 年に開催した「南国博」での「芸能館」において、県内各地に伝わる民族芸能と共に「新しいよさこい踊り」が披露され好評を博した。これは有名なお座敷踊りであるよさこい踊りを、新しい時代に合った、誰でも楽しめる踊りにしようと、花柳，若柳，藤間，坂東，山村の日舞五流派の師匠に依頼し，共同で振り付けられた。この成功を一過性で終わらせたくないとの行政の協力を取りつけ，昭和 29 年にはすでに定着し活況を呈していた徳島県の阿波踊をふまえ，不況の沈滞ムードを一新する高知市民の祭りとして位置付けられるに至った。第 1 回は企画，作詞作曲，振り付け，練習のすべてがわずか 4 か月という期間で準備された。第 21 回(1974)には，市民の祭りから県民の祭りに発展させることを申し合わせ，県内外の市町村の祭りや行事に派遣，参加するようになった。

一方，YOSAKOI ソーラン祭りは，1991 年に当時北海道大学の学生であった長谷川岳氏が，高知市でよさこい祭りを見て，若者のエネルギーがあふれている，音楽も衣装も現代的な祭りを初めは大学祭でやりたいと思ったことがきっかけであった。偶然見たチームのダイナミックで切れのいい踊りに鳥肌が立ったという。それから 1 年たらずの 1992 年に，10 チーム 1,000 人の参加者から始まった。札幌に招聘した高知の実力派チームのコピーのような踊りを経て，年々チームや地域のカラーが見られるようになり，1998 年には第 7 回目が行われた。

どちらの祭りも既存の祭りのスタイルのどこかに地域らしさを加えることで独自性を出し，短時間で成立している。そのためスタイルは流動的であり，チームごとの自由度が高い。

2) 規模の拡大

参加団体数が百を越えるのは，よさこい祭りは第 32 回(1985)，YOSAKOI ソーラン祭りは第 5 回(1996)である。参加人数が 1 万人を越えたのは，よさこい祭りは第 30 回(1983)，YOSAKOI ソーラン祭りは第 5 回(1996)である(表 1，表 2)。

よさこい祭りは記念の回ごとに規模拡大が図られた。30 回記念よさこい祭りは例年の県補助金 50 万円を 300 万円，高知市補助金 150 万円は 350 万円，寄付も前回の実績 236.5 万円を 600

表1 よさこい祭りにおける参加団体数と踊り子参加人数の推移

年次	回数	参加団体	参加人数	年次	回数	参加団体	参加人数(人)
1954	第1回	21	750	1977	第24回	62	6,500
1955	第2回	30	1,600	1978	第25回	61	6,100
1956	第3回	30	1,200	1979	第26回	65	6,500
1957	第4回	29	2,000	1980	第27回	66	7,000
1958	第5回	37	2,000	1981	第28回	64	7,000
1959	第6回	47	2,500	1982	第29回	68	8,000
1960	第7回	42	2,500	1983	第30回	86	10,000
1961	第8回	53	3,900	1984	第31回	91	12,000
1962	第9回	48	3,260	1985	第32回	106	13,000
1963	第10回	43	3,500	1986	第33回	111	13,500
1964	第11回	40	3,500	1987	第34回	114	14,000
1965	第12回	39	3,500	1988	第35回	110	13,000
1966	第13回	34	3,000	1989	第36回	123	14,200
1967	第14回	43	3,700	1990	第37回	126	15,000
1968	第15回	49	4,000	1991	第38回	137	16,200
1969	第16回	58	4,800	1992	第39回	138	16,200
1970	第17回	45	4,000	1993	第40回	144	16,500
1971	第18回	44	4,500	1994	第41回	133	15,200
1972	第19回	43	3,500	1995	第42回	123	13,300
1973	第20回	63	5,500	1996	第43回	123	13,500
1974	第21回	61	5,300	1997	第44回	126	14,000
1975	第22回	62	6,000	1998	第45回	122	14,000
1976	第23回	59	6,000				

よさこい祭り振興会発表資料から作成

表2 YOSAKOI ソーラン祭の成長

	第1回 1992年	第2回 1993年	第3回 1994年	第4回 1995年	第5回 1996年	第6回 1997年	第7回 1998年
参加数 チーム 人 数	10 1,000	26 2,500	25 3,000	48 4,800	108 10,000	183 18,000	280 29,000
参加地域 道内(市町村)	4	5	9	17	55	107	132*
道外(都府県)	2	2	2	4	5	11	20*
会場数	3	6	6	7	12	11	25*
観客動員 (万人)	20	44	58	76	107	138	160*

YOSAKOI ソーラン祭実行委員会発表資料より作成

*見込数

万円と見込んで、総額 1,310 万円（前年 486.3 万円）としたことが、動員数に弾みをつけたと思われる。第 36 回は高知市政施行百周年に当たり、祭りを盛大にするために、参加チームを増やすと共に、本部前に予約枠敷席を設けた。参加人数は 1 万 5 千人に達した。そして 1 チーム 150 人以内の徹底、鳴子を必ず持って踊る、音量の自主規制、チーム自体で節度ある行動を呼びかけるなど参加者増加への対処としてルールづくりがなされた。第 38 回は生みの親である高知商工会議所の創立百周年に当たり、瀬戸内地域への宣伝のため TV スポットを入れるなどし、

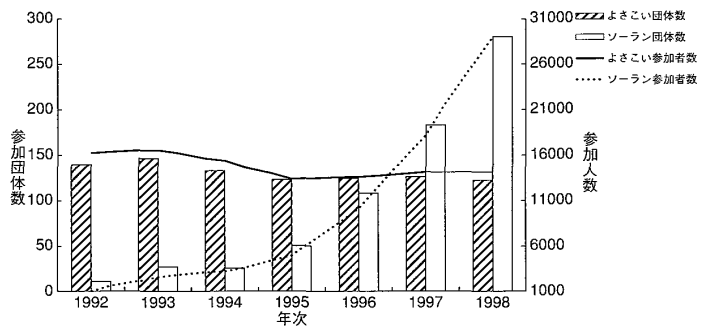
前年より 11 チーム、1,200 名の増加を見た。第 40 回は記念フォーラムとして祝賀会、YOSAKOI ソーラン祭り実行委員も参加するシンポジウム等も開かれた。144 チーム 1 万 6 千 5 百人を記録したが、その後は頭打ち傾向で、若干の減少が見られる。

3) よさこい祭りの拡大を阻害する要因と北海道の YOSAKOI ソーラン祭りの対応策

北海道の YOSAKOI ソーラン祭り

りが開始されてからの、二つの祭りの参加人数の推移を比べて見ると、6 回目の 1997 年には YOSAKOI ソーラン祭りがよさこい祭りを上回り、逆転現象が起きている（図 1）。本家のよさこい祭りが 45 年間継続し、かつ若者の支持を受けながら、第 32 回（1985 年）以降、参加数がほぼ頭打ち状態であることから逆説的に考えると、祭りの拡大とそれを阻害する要因が見えてくるだろう。

図 1 よさこい祭りと YOSAKOI ソーラン祭りの参加人数の推移



高知新聞の連載記事は、祭りが抱える資金、会場、交通、日程、組織に関する問題点を取り上げている。

①資金

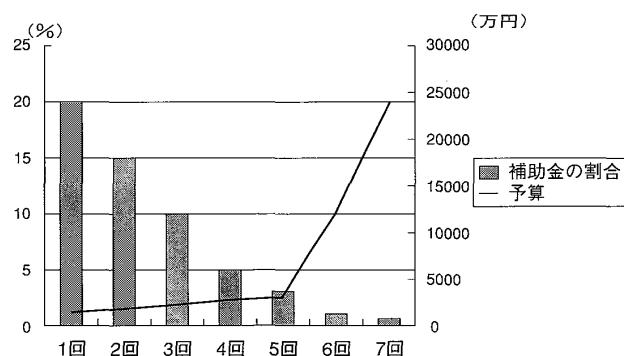
よさこい祭りの 7 千万円を越える総予算の 3 割以上を協賛企業の広告費が占める。これを集める仕事は容易でなく、高知商工会議所内の「よさこい振興会」事務局の大きな負担になっている。また、9 か所の地区共演場の運営は地元商店街振興会などに任されており、大型店に押されて老舗が店をたたんだり、後継者問題などで、会場統合の可能性も出てきている。

祭りの経済波及効果は 71 億円以上に上るといわれるが、運営は多くの団体、業界が負担しながら育ててきた経緯があり、今から一本化して、祭り振興の財源に組込むのは難しい。

一方、各参加団体の費用負担も大きくなり、運営費に 400 万円以上かかるというチームも 3 割近くあり、子供会や連続出場してきたチームが出場を見合わせる例もあるという。

財源として経費を参加者も負担するという点は、YOSAKOI ソーラン祭りを創始した長谷川氏も特にこだわったところであった。同世代の若者が自己負担していることを知り、人手不足でアルバイトの学生が神輿

図 2 YOSAKOI ソーラン祭りの予算と補助金の割合



を担ぐような祭りでなく、お金を出してでも参加したいような活気のある祭りにしたいと思ったという。自治体、企業からの援助に頼り切らず、可能な限り自主財源で賄うという方針を採った。第1回は1,300万円の予算のうち企業の協賛金が80%、補助金が20%を占めたが、第7回では2億4千万円のうち協賛金比率は25%、補助金は0.5%にまで縮小した(図2)。自主財源として、参加費のほかに有料栈敷席、踊り子を対象とした月間機関紙の年間購読、「YOSAKOIソーラン祭り」の商標権や公認グッズ販売といった方針が打ち出された。これが功を奏し、不況や北海道のメインバンクである拓殖

銀行の破綻の影響で祭りの存続が脅かされるというリスクは抑えられた。商業主義という批判も免れないが、一方では小中学生の参加費と運営協力費を無料にするなどの措置を取っている(表3)。

②会場

よさこい祭りは参加者の増加にともない会場を増やして発展してきたが、10か所の現状を変えるのは難しい。1988年には、よさこい祭り振興会が主会場移転の案を出しているが、交通渋滞や周辺住民の同意の問題、そして3倍弱に跳ね上がる経費の見通しが立たず進んでいない。

一方、北海道のYOSAKOIソーラン祭りは開始されてから会場数が年々増加し、1998年には札幌市内だけでも26か所となった(表4)。大賞を受賞した平岸天神チームが道内のイベントに招聘され踊りを披露したことなどから、札幌まで見に来られない人にも踊りが浸透し、13の支部・ブロックが組織され、支部大会

表3 第8回 YOSAKOI ソーラン祭りの参加費用

参加費	企業チーム	20万円
	一般チーム	5万円
	子供会・小・中学校チーム	無料
運営参加費	出場予定のメンバー一人につき ・チームで一括納入 ・小・中学生免除、高校生は任意	1,200円

参加申し込み時に上記の合計金額を振り込む

表4 よさこい祭りと YOSAKOI ソーラン祭りの会場 (1998年)

	よさこい祭り	YOSAKOI ソーラン祭り
本祭会場	旭競馬場 上町競演場 升形競演場 中央公園競演場 追手筋競演場 梅ノ辻競演場 菜園場競演場 知寄町競演場 愛宕競演場 万々競演場	5丁目 } 6丁目 } 大通りパレード 7丁目 } 北コース・南コース 9丁目 } 10丁目 } 大通り西8丁目ステージ 一番街会場 道庁赤れんが会場 すすきの会場 サッポロファクトリー会場 JR 桑園会場 サッポロビール園会場 元町会場 麻生会場 新琴似会場 琴似会場 イシヤチョコレートファクトリー会場 手稲会場 平岸会場東コース・西コース エスパ福住会場 本郷通会場 ニチイ大谷地会場 清田会場 新札幌会場 澄川会場 川沿会場
	10か所	26か所

を運営するところも出てきた
(表5)。それにともない道内
の広い地域から出場チームが
出るようになった(図3)。

道路閉鎖による周辺の渋滞
という問題も、もともと計画
都市で、車道歩道を含め余裕
のある札幌市では、道路交通
法による制限があるものの、

混乱を招くには至っていない。

道警の指導で、札幌市内チーム
からは、クリーンキャンペーンス
タッフか運営スタッフを出してもら
うこともしている。

③交通

よさこい祭では離れた会場移動に
チームごとにバスをチャーターして
おり、これが交通渋滞やチームの費
用負担の問題にもつながっている。

これに対し、札幌市では地下鉄に
よる移動が可能である。また。遠隔地からの参加者や観客のための宿泊収容施設にゆとりがあ
る点も、拡大化を支えている。

④日程

よさこい祭りの日程は、8月9日-12日に固定されている。徳島の阿波踊りに重ならないよ
うにという考えと、雨が少ないという気象記録によるという。土、日曜日の開催を望む声もある
が、観光業界には、もともと客の来る土・日では対応し切れないし、収入が減るという意見
もある。

YOSAKOI ソーラン祭りは、1998
年には6月3日から7日までの5日
間行われ、本祭である大通りパレ
ードは、6日と7日の土、日に行われ
た。1999年も同時期の5日間で本祭
を土、日に当てている。梅雨がない
気候的条件や、観光面では夏の繁忙
期に入る少し前で、冬期の雪祭りの

表5 YOSAKOI ソーラン祭り支部開催例(1998年)

支部	大会名	開催初年度
渡島支部	YOSAKOI ソーラン祭り函館大会	1997年
檜山支部	YOSAKOI ソーラン祭り檜山大会	1995年
千歳支部	(日本の祭りフォーラム in Citose)	1997年
南空知支部	南空知 YOSAKOI ソーラン祭り	1997年
空知北支部	空知北 YOSAKOI ソーラン祭りジュニア大会	1998年
日高支部	YOSAKOI ソーラン祭り日高支部大会	1995年
オホーツク支部	YOSAKOI ソーラン祭りオホーツク支部大会	1997年
計13支部, ブロック		

図3 YOSAKOI ソーラン祭りの参加地域数の推移

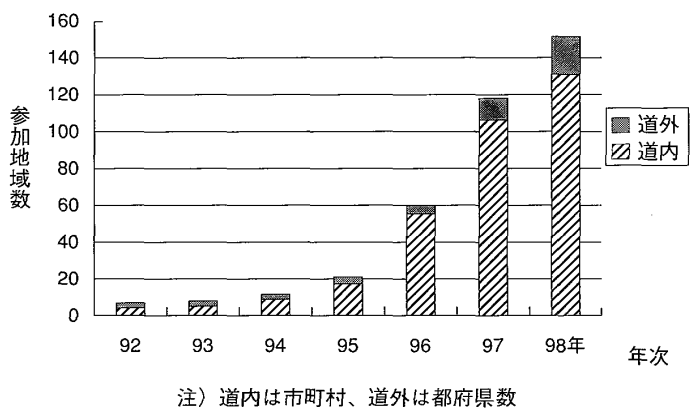
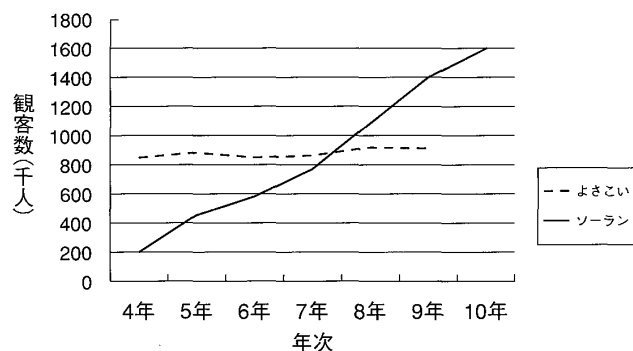


図4 観客動員数の比較



ような大きなイベントが他にないことも観客動員に有利に働いている（図4）。

⑤組織

祭りの規模に合わせて、主催する組織を編成し直す必要が出てくる。よさこい祭りでは祭りの拡大、進化に細かな対応が追いつかない、企画力や行動力が足りないという状況に、高知商工会議所と高知県、市、そして参加者の代表からなる組織の一元化の必要性が上げられている。

YOSAKOI ソーラン祭りは、YOSAKOI ソーラン祭り組織委員会と、実質的運営にかかわり、主に学生からなる YOSAKOI ソーラン祭り実行委員会の2つの組織からなる。学生組織から始まった祭りも普及に伴い幅広い年齢層が参加するようになり、分業化が進み学生がかかわる部署は限定されてきているように見える。

2 特性

1) YOSAKOI ソーラン祭りがよさこい祭りから踏襲したところ

①条件

長谷川氏は初め、よさこい祭りをそのまま札幌に持ってこようと考えていたが、実行委員会のメンバーの反対にあう。そこで曲は北海道らしいソーラン節に置き換えられたが、条件は高知を踏襲している。YOSAKOI ソーラン祭りの条件は、曲にソーラン節の1フレーズを盛り込む（よさこい祭りはよさこい節のフレーズ）ことと、鳴子を持って踊るというシンプルなものである。

②形式

屋外でのパレードとチーム参加という形式は、徳島の阿波踊が元になっているとも考えられる。1956年の第3回よさこい祭りで、舞台に通路をつけ、踊り子たちが見物客の前をねることができるようにした。「よさこい祭り40年史」には、踊りが身近かで繰り広げられるようになったことで「“見る踊り”から“感じる踊り”となる。」という記述が見られる。

民族舞踊には列の体形を取るものが多く見られる。前進する運動は力強く、明るく活気あるイメージを想起させる。見物する側にとっても、次々と趣向を凝らしたチームが入れ替わりやって来て飽きさせない。道路はステージ（見せ場）となり、日常の規範を離れ、価値観の置き換えがなされることにより解放感が得られる。

③音楽

音楽は条件を満たしていれば自由で、どちらもロック、サンバ、民謡調、ヒップホップ等様々なジャンルのものがある。「学校教材用 YOSAKOI ソーラン踊り」という主催者の用意したオリジナルな曲に振りつけを施した普及版の踊りもあり、公認CDも用意されている。又もとの民謡をアレンジしたヒット曲がある事も共通している。第6回よさこい祭りが行われた1959年（昭和34年）には、ペギー葉山が歌った、よさこい節を踏まえた「南国土佐をあとにして」が全国的にヒットして、観光客が倍増した。ソーラン節は、伊藤多喜雄がロック調にアレンジした曲が1988年にヒットし、体育祭のマスゲームやダンスの教材としても利用されていた。

④振り付け

振り付けの特徴は、どちらも創作であるという事である。第6回よさこい祭り(1959年)で「新作歓迎」を打ち出した結果、工夫を凝らしたものが登場するようになったという。優雅な鳴子裁きの上肢の動きや、跳ねるリズムのよさこい祭りに比べ、YOSAKOI ソーラン祭りは元曲のにしん漁の労働の動作の影響か、腰を低くした上下動の大きい動きが特徴的である様に思える。音楽や振り付けの普及版を利用するグループもある。

よさこい祭りはプロの振付師が多く、振付師でチームを選ぶ人もいる。ジャズダンスのインストラクターや日本舞踊のお師匠さんなどで、レッスンや本番で踊る事も含めて契約する場合が多く、数カ月前から振り付けする。地元のある振付師の契約金は1か月約30万円で、大事な収入減になっている。YOSAKOI ソーラン祭りも回を重ねるごとに技術的水準が上がり、入賞を目指すチームはプロの振付師に依頼するところも増えてきた。ダンス教室やフィットネスクラブが、振り付けとレッスンを含めてメンバーを募るケースも出てきている。

⑤用具

特徴があるのは、鳴子と地方(じかた)車である。鳴子は高知市のよさこい祭りに固有な地方色の感じられるものであったにもかかわらず、YOSAKOI ソーラン祭りの条件としてもそのまま取り入れられた。

リズムは鳴子で増幅され、音を通して外界に対して働きかける表現手段になる。踊り慣れない者には、メリハリのある動きは難しいものだが、鳴子の使用によって、あいまいな動きでもチームのリズムに同化できる。観客にもリズムを介したコミュニケーションを容易にさせる。鳴子を手にする事で、演じる世界、つまり祭りという非現実的な世界に入ることが出来る。ユニフォームをまとったように演者へと変身した集団に一体間が生まれる。

地方車は第4回よさこい祭りから登場し、トラックに音響機材や生バンド、後には夜間用の照明機材運搬を積載し、広告等の役割も果たす。音響や照明を会場に固定されたものだけに頼らないため、多くの会場で複数のチームによる同時進行が可能になったと思われる。

2) 鳴子踊りの伝播

郷土芸能は受け継がれる過程で、変化発展し、あるものは消滅し、その発祥が明らかでないものが多い。しかし戦後商店街の活性化を目的に創られたよさこい祭りは、鳴子踊りの発生の記録が残っている。鳴子を用いる発案は、高知在住の作曲家、武政英策氏による。作詞作曲の依頼を受け、伝統ある阿波踊りに対抗するには素手ではだめだと、二期作が盛んな高知市で、稲を雀から守るために鳴らした鳴子を手を持つことを思いついたという。他の地域に普及するにつれ、民芸調カスタネットという感じに溶け込み、本来のイメージは薄れている様である。

鳴子踊りは、YOSAKOI ソーラン祭りの他にも、阿寒町での「YOSAKOI ほろろん祭り」のような道内支部組織、石川県和倉温泉の「YOSAKOI かいかい祭り」、埼玉県朝霞市の「朝霞市民まつり」、静岡県沼津市の「沼津ワールドフェスタ」、宮城県仙台市の「みちのく YOSAKOI 祭り」大阪市貝塚市の「YOSAKOI ソーリャ・プロジェクト」など、各地に広まっている。し

かもそれらの地域はよさこい祭りではなく、札幌の YOSAKOI ソーラン祭りからを見たことで、鳴子踊りとソーラン節を導入している。

そうらん祭りも YOSAKOI ソーラン祭りも、海外を含め、各地のイベントへの招聘に応じ、鳴子踊りの普及に積極的に応じている。本祭以外にも各地で年に何度も踊るチームもある。それらの地域と交流も進み、互いの祭りに自費で出向いて踊るチームも出てきている。

教材としても多くの学校で取り入れるようになり、稚内南中学校の様に学校での取り組みが生徒を変容させた例も紹介され、映画化された。教師、生徒、保護者などの間に共通の話題が生れる。身体を通したコミュニケーションは人との距離を縮め、自分や友達の別の面を見ることができ、集団のリズムとシンクロナイズすることで疎外感がいやされる。十分な活動量は充実感とカタルシスをもたらすストレスを緩和させる作用も考えられる。

3) 観客とのつながり

マーチンは、人間の身体は他の身体の行動に激しく反応する、「単なる観客である事をやめ、我々の前に示される動きに参加し外見上は座席に静かに腰をおろしていながらも、全筋肉を使い、共感を持って踊っているのである¹²⁾」と述べている。踊り手を動かす感情的な連繋は、観客の運動感覚によって受け取られ、観客の中に同様な感情的連繋を呼び覚ます。この運動反応が、踊りを見た人に、「鳥肌が立った」「胸に迫るものがあ⁸⁾った」と言わせるものと考えられる。

踊りが、たった一人の人間の身体を通して、遠く離れた別の地域に根つき発展していく不思議さ。芸能は、自らが体験し共鳴、感動するという、身体を通して伝播していく事がわかる。論理的に知識を吸収し、理解するのとは別で、一瞬にして大きなエネルギーを得る、つまり感じるのである。マスメディアは一度に何百万という人に情報を伝えることができるが、鳴子踊りが、実際に目にした者によって一か所づつ広がっている事実は、生きた人間、身体を通してしか伝えられないものがあることを示している。

III ま と め

YOSAKOI ソーラン祭りが拡大し続けているのはなぜか。

札幌の祭りは、規模が大きくなった時点でのよさこい祭をモデルとしているため、将来的な課題が初めから予想、対処できたと考えられる。

よさこい祭で行われている前夜祭の花火大会や、モデルの写真撮影会など、踊りとは関連のない部分をそぎ落とし、舞踊の魅力を前面に出したことで、地方色が薄れ、普遍性が高まったことも、他の地域への普及に一躍買っているだろう。

一学生の感動が発端となったこともイメージアップにつながっている。利害とは別の価値観に新鮮さを覚え、夢や希望を託す人は多い。太平洋フェリー北海道支店長は企業として最初の協力者となり、100万円の寄付をした上に、テレビ局 STV へ紹介したことから、急速に人脈が広がり、第1回開催につながった。

また、祭りの創設者である長谷川氏自ら、各地の求めに応じ、祭りやチーム作りの相談や紹

介に出向いていく事で、祭りの当初の理念が理解され、貫かれている事もある。

次に、この踊りの何が人々の心をつかんだのか。

第1に、リズムを増幅させる鳴子と元曲である民謡が持つ強い個性が、この踊りの枠組みを明確なものにし、他の踊りとの差別化が図れた。第2に、創作することで自分たちの踊りやチームに深い愛着が生まれ、参加者が主体的になる。第3に、パレードで観客の目前で踊られる事で、観客に踊り手との同化が起こり易いという事が考えられる。

鳴子のリズムは、踊り手にも観客にも自分の体を通して感じられる。価値観が揺らぎ、将来が見えにくい最近の情勢の中で、信じられるのは、自分の身体感覚を絶対的な指標として捕らえられるものだけなのかもしれない。舞踊の持つ力は、古事記の天照大神が踊りに誘われ岩戸を開ける記述が示すように、生と死、陰と陽の繰り返すリズム、つまり再生のエネルギーとも言える。YOSAKOI ソーラン祭りは巨大化しながらも、現時点では、古代から祭りや踊りという芸能が本来果たしてきた、生きるエネルギーを喚起させる時空として機能し、多くの人の共感を呼んでいるといえる。

引用参考文献

- 1) 朝日新聞, 1998, 6月3日.
- 2) 石黒節子, イメージ・コミュニケーションとしての舞踊, 三一書房, 1999.
- 3) 梅本堯夫, 認知とパフォーマンス, 東京大学出版会, 1987.
- 4) 邦 正美, 動きのリズム, 1960.
- 5) クラーゲス, リズムの本質, みすず書房, 1971.
- 6) 小林康夫, 身体と空間, 筑摩書房, 1995.
- 7) 菅原和孝編, コミュニケーションとしての身体, 大修館書店, 1996.
- 8) 高橋真琴・馬場京子, 「より楽しくより豊かなダンスムーブメントへ」, 女子体育, 40巻10号, pp.48-51, 1998.
- 9) ハリスン・ジェーン・エレン, 古代の芸術と祭祀, 法政大学出版会, 1974.
- 10) フィシャー・S., からだの意識, 誠信書房, 1979.
- 11) 舞踊教育研究会編, 舞踊学講義, 大修館書店, 1991.
- 12) マーチン・J., 舞踊入門, 大修館書店, 1980.
- 13) 宮尾慈良, 宇宙を移す身体, 新書館, 1994.
- 14) 湯浅慎一, 知覚と身体のパラダイム, 太陽出版, 1978.
- 15) ランゲ・ロデリーク, 舞踊の世界を探る, 音楽の友社, 1981.